The Bachelors における‘stranger’としての Ronald

畑中杏美

はじめに

The Bachelors（1）は Muriel Spark の第五作目の小説として 1960 年に出版された。プロットだけを拾い読みしていくならば、*The Bachelors* は、カトリックと心霊主義という価値観の対立、そして、カトリックという価値観の勝利を描いている作品と読むことができ、そのために、Spark の作品にしては単純で陳腐な作品のようでもある。しかし、心霊主義者の霊媒 Patrick と、癲癇の発作がでたときの Ronald の姿には類似する点も多く、必ずしも二元的な主題が描かれているのではないことはしばしば指摘されてきた。それでもなお、悪魔的で面白みのある Patrick にくらべると、Ronald というキャラクターが評価されることは少なかったといってよいだろう。そこで本発表では、自分を取り囲むコミュニティにおいて同化できない‘stranger’としての自己を見出す者として、Ronald に注目して *The Bachelors* を読み直した。

癲癇

Ronald Bridges の癲癇の発作がはじまったのは 23 歳のときだった。そのとき彼は、神学を志し、司祭になろうと決めたばかりの大学院生であった。病のために神職への道がとざされた Ronald は、筆跡博物館で働くことになるが、司祭になれなかった人間としての自分を思うたびに苦悩する。Ronald が通う教会ではとても若い司祭がミサを執り行っているが、Ronald は、その司祭にあからさまな嫌悪感をむけているのである。Ronald には、何の疑いも持たずに、このとても若い司祭を‘Father’と呼ぶことも、別れの挨拶と共にちょっとした雑談を交わすこともできない。Ronald は、カトリック教徒でありながら、他の教徒とは馴染めず、信心深く、疑うことを知らないほかのカトリック教徒たちの輪に加わることができずにいた。

自分が大多数の他者とは異なる存在であるという自覚は、Ronald に孤独を感じさせるが、特別な視点を与えてもいる。癲癇の発作がはじまったころ、アメリカ人の医師に、被験者にならないかと誘われ、Ronald はカリフォルニアで新薬の実験に参加したが、むしろ発作はひどくなるばかりだった。60 名の被験者のうち 3 名だけが改善の兆候を見せず、Ronald は新薬が効かない患者の一人であった。Ronald は、もう少し投薬をつづけてみないかという医師の勧めをはねつけ、ひとり、イギリスへ帰国することを選ぶ。彼には、癲癇の患者ばかりのコミュニティにおいてすら居場所がない。だが、このとき Ronald は、ほかの患者たちはもともと「半分しか起きていない」ようなものだ、と思う。Ronald にとって癲癇は、コミュニティからのけ者にされる烙印、天職への歩みをつまずかせる石のようなものであったが、癲癇になってからの Ronald は、常に自分自身と身の回りの状況に敏感でいなければならない。つまり、常に「起きて」いなければいけない人生を始めるきっかけをつくったのも、癲癇という病だったのである。

疑わない人々と迷う人

しかし、病を受け入れて生きたとしても、Ronald はどこかのコミュニティに属しているという安心感を持つことができないでいた。Ronald には友人も少なくはないが、心霊主義者たちの友人と一緒にいて Ronald の心が休まるということはない。心霊主義者の集会を主催する Marlene と、その甥 Tim、そして Ronald が昼食を一緒に取っていた際、Ronald は、心霊主義に理解を示そうとするのだが、心霊主義者からしてみればカトリック教徒は相容れない存在である。しかも、聖人崇拝は、「偶像崇拝」だという Marlene の指摘を受けて、言い返すことのできない Ronald は、カトリック教徒としての自分の信仰に迷いがあることにも気づかされるのである。

さらに興味深いのはアイルランド人の Matthew と Ronald との対話である。Ronald にとって、カトリックであり、同じ教会に通う Matthew は、原罪や救済など、神学的ともいえる話題で会話をしうる唯一の友人である。しかし、カトリック教徒としての自分と Matthew とを比べてしまうとき、Ronald は心穏やかではいられない。

> ‘Of course, you know,’ Matthew said, ‘she isn’t a Catholic. She’s a spiritualist.’
> ‘I don’t suppose she’d let it stand in her way if she wanted marry you.’
> ‘I meant, from my point of view—’
> ‘Yes, I know what you meant.’
> ‘Well, as a Catholic how do you feel about—’

Ronald turned on him in a huge attack of irritation. ‘As a Catholic I loathe all other Catholics’

‘I can well understand it. Don’t shout, for goodness’ sake—’ Matthew said.

‘And I can’t bear the Irish.’

‘I won’t stand for that,’ Matthew said.

‘Don’t ask me,’ Ronald shouted, ‘how I feel about things as a Catholic. To me, being a Catholic is part of my human existence. I don’t feel one way as a human being and another as a Catholic.’

‘To hell with you, now,’ Matthew said. (*The Bachelors* 85-86)

Matthew は、心霊主義者にあからさまな嫌悪感を示し、好意を持っている Alice が霊媒の Patrick と関係しているのはとんでもないことだ、と批判する。彼が心霊主義に反対する理由は単純で、Matthew にとって、カトリック教徒であることとアイルランド人であることは同じことだからだというのだ。つまり、カトリック教徒であるということは、国籍とおなじく、生まれながらにそなわっているものであると Matthew は考えているのである。滑稽で、堕落した人物としてさえ描かれる Matthew であるが、罪を犯せば告解をするし、ミサに出かけ、Ronald がどうしても好きになれないあの若い司祭を ‘Father’ と呼ぶことにもまったく抵抗がない。Matthew は、Ronald と同じカトリック教徒であるが、心霊主義者の Marlene に近い、迷いや疑いというものを持たない人なのであるといえるだろう。

では、癲癇の患者たちのコミュニティにも、通っている教会にも居場所がなく、信仰にも揺らぎのある Ronald は、どのようにして自己というものを見出していくのだろうか。これまで見てきたように、Ronald という個人は、自分が何者であるのか、ではなく、自分が何者ではないのか、によって自己を規定してきた。まず、癲癇を持っているために、司祭になることのできないカトリック教徒になった。新薬の実験に参加したが効果がでず、「半分寝たまま」で生きていく患者にもなりたくない。そのうえ、心霊主義者でも、アイルランド人でもない。そのようにして、否定的に確立してきたアイデンティティをいくつも併せ持つものとして Ronald を考えると、カトリック教徒であるということもまた、普通のカトリック教徒ではない、という否定的な意味において、彼の自己認識を部分的に支えるものとして考えられるべきなのであろう。

この居場所のなさ、帰属するコミュニティの欠如した存在、一つの価値観によって規定できない自己を、Ronald は‘stranger’ということばを用いて表したのではないだろうか。‘Stranger’ という言葉には、多様な意味が付与できるだろうが、作中でこの言葉は Patrick の裁判で重要な証拠となりうる手紙を盗んだ Elsie Forrest との対話においてやや唐突に用いられる。この二人には、自分の居場所を見出すことができず、それゆえに苦しむ者であるという共通点があるといえるだろう。Ronald は、否定を用いずに自分を言い表すことのできることばを、自分と同じように苦しむものとの対話において見出したのである。

そして、‘stranger’ としての自己に気づくことによって、Ronald は、ロンドンに寝起きする独身者たちはみな、自分とあまり変わらない、不毛で空虚な人生をおくる人々であるということにも気がつく。

It is all demonology and to do with creatures of the air, and there are others besides ourselves, he thought, who lie in their beds like happy countries that have no history. Others ferment in prison; some rot, maimed; some learn over the banisters of presbyteries to see if anyone is going to answer the telephone. (*The Bachelors* 231)

このとき Ronald が思い起こす人々はみな、独身者である。彼らは「実態を持たない生き物」であり、癲癇の発作で倒れて痙攣をおこしている Ronald も、そのような生き物ののひとつだ。Ronald はこれを「悪魔学」(demonology)であるとし、何食わぬ顔をして日々を過ごす人々がもつ悪魔的な側面を、冷静に見つめることができるようになっている。自分が所属すべき場所を持っていることに安心し、ときに傲慢にふるまう独身者たちのなかには、他者の人生を自分の思うままに操ろうとして投獄されている者もいる。そのような罪を犯す人の群れのなかにいて、Ronald もまた、Patrick と同じく、罪深き独身者のひとりなのである。しかし、そのような自己を認識できる者が、ロンドンに暮らす独身者のなかにどれだけいただろうか。Ronald がこのような視点を得ることができるようになったのは、自己を否定することによってしか自分を理解できず、信仰にも迷いがある、‘stranger’ であったためだったのではないかと考えられる。

註

（１）Spark, Muriel. *The Bachelors*. New York: New Directions. 1999.以降、同著から引用する場合は引用のあとの括弧内に書名のみ示す。書名の後の数字はページ数を表す。